

第 33 話 : 「グローバル社会を生きるために」

平成 32 年度から高学年で外国語科が、中学年で外国語活動が導入され、英語学習の特質をふまえて、読むこと、書くこと、聞くこと、話すこと（やり取りと発表）の合わせて5つの領域で、コミュニケーションを図るための素地と基礎となる資質能力を育成することが求められます。

こうした状況の中、11月30日に、文部科学省教科調査官 直山木綿子先生を講師にお迎えし、「平成29年度外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」に係る研修協力校として、本校の公開研究会が行われました。ご参加いただいた皆様方から、大変貴重なご指導やご意見をいただき今後進めていかなくてはならないことが見つかりました。

1つ目は、児童が主体的に学ぶためには、必然性と意外性のある学習を創造するということです。これまでの学習では、教師が話す英語を児童が繰り返して話したり、あらかじめ書いたものを読んだりする場面が多くあったように思います。インプットすることはとても大切ですが、英語をコミュニケーションのツールとして、日常生活にありがちな場面を設定して、児童同士が自分の思いを伝え合ったり、聞き合ったりすることにより、相手を深く理解したり、お互いの良さやこれまで気づかなかった一面を発見したりすることが大きな喜びになることがわかりました。しかし、児童が教職員に“*What color do you like?*”とインタビューして、“*I like red.*”と回答した後に、教職員が子どもたちに、“*What color do you like?*”と聞き返すと、“*I like blue.*”とは答えてくれますが、“*Why?*”と尋ねると、「・・・」というケースが多くありました。高学年の児童がやりとりする力をつけるためには、“*I see*”“*OK*”といった反応だけに留まらず、相手との共通点を見つけて、今までに習った文型を活用して会話をどんどん膨らませていくことが求められると思いました。



2つ目は、英語の学習をもとに、日常生活においても英語にふれる時間を多く確保するということです。今回の公開研究会において、教師が英語を使うことの壁を低くするのは、教師や児童がどれだけ多くの英語を使うかにかかっているということを教えていただきました。授業で学習したことをもとに、児童が日常生活の中で、楽しみながら英語にふれるよう、教職員が創意工夫することが求められます。言い換えると、児童が主体的に学ぶためには、教職員自身が主体的に学ぶ必要があることを実感しました。

また、こうした教職員の「創意工夫」や「うまくいかなかったこと」をデータベース化することが大切であるというご指導もいただきました。一人の教師の取組や発見を教職員全体で共有するシステムを構築することが研究を深め、それがグローバル社会をたくましく生き抜く人材育成につながっていくことだと考えました。We must bring up sturdy children to live in the global society.

最後に、県内各地から200人以上の方々にご参加いただいて、本校の公開研究会が開催できましたことを、この場を借りまして、心より感謝とお礼申し上げます。

